連載 ― これから必要な言葉の力とは何か 6

「聴聞（リスニング）マインド」に心掛けませんか

子ども家庭教育フォーラム代表／カウンセラー　富田（とみた）　富士也（ふじや）

面接時間が終わりに近づいて一人の気後れ気味だった少年が私の相談室でつぶやいた。

「あぁ、すっきりした。こんなに聞いてもらったのは生まれてはじめてです。」

私はためらいながら問い返す。

「嘘だろう。お父さんやお母さんや、先生だって聞いてくれただろう。」

すると次のような内容の話をしてくれる。

「言葉の意味や事柄は聞いてくれましたが、気持ちは聴いてもらえませんでした。みんな忙しいから余裕がないのかもしれませんが、言葉尻ばかりとって聞こうとするんですね。『今、なんと言った。もう一度言ってみなさい。』『先生に分かるようにもう少し筋道を立てて話してごらん。』『その話の意味を教えてくれ。』すぐこんな聞き方をするんです。だからめんどくさくなって話したくなくなるんです。ただ聴いてくれるだけでいいんですよね。『クソ母親（ババア）』って言ってみたい気持ちを黙って先に聴いてほしいんですよね。」

またある男子中学生は無口から不登校になり心配して相談室につれてきた父親にこう言った。

「中学生になったから無口になったわけじゃないんだ。話したいことはいっぱいあった。でもお父さんもお母さんも僕が小学五年生ぐらいから『くだらない話をするな。つまらない話をしている暇があったら勉強しろ。』『言ってもなんの"得"にもならないことをいつまでも言ってないで、どんどん学校に行きな。』と僕の不安や心配を聞いてくれなかった。聞く気のない人に話しても無駄だと思って無口になった。話したくなるような聴き方をしないで、話したくなくなるような聞き方ばかりするんだ。だから無口になった責任の一部はお父さんにもお母さんにもあるんだよ。」

短時間で効率の良さを求める価値観にいちばん似合わない、なじまないのが人間関係である。とくに自己否定を伴い、彷徨（さまよ）うような心理的状態のときこそ手間をかけてその言い尽くせぬ思いを誰か心を寄せる人に聴いてほしいものである。その瞬間に人は善し悪し関係なく存在そのものを肯定され新たな意欲を生み出すことができる。

聞こえてくる言葉の後にある余韻を聴いてほしいのである。「クソ親父……」の後に漂うこの「……」の気持ちをまずくみ取って、その感情を言葉に明確化してフィードバックしてほしいのである。

言葉を正確に聞くことはもちろん大切である。しかし、「聴」という漢字を分けて、「耳」「十四」「心」ととらえ、一つの言葉を「十四」の心を込めて、脇から寄り添う（共感的）ように「聴く」ことも大事である。それこそが、肯定的な人間関係、コミュニケーションの"秘訣"（カウンセリングマインド）といえないだろうか。とくに自信喪失気味で心に余裕をなくした子どもに対しては、発する言葉をすべていったん許して「聴」く。そして、その悪態や弱音も肯定的に歩む努力の証として信じて「聞」くのである。私はこれを「聴聞（リスニング）マインド」と呼んでいる。

手先は器用だが勉強のおぼつかない中二の少年がやはり口やかましい父親にこう言った。

「僕は縄文時代に生まれていればよかったな……」

「ばかだな。今は平成だぞ。なんで縄文なんだ。」

少年は語る気力をなくして黙り込むしかなかった。あなたならどんな「聴聞（リスニング）マインド」でその気持ちを言葉にしてフィードバックするだろうか。

「そうだね、せめて弥生時代だったらね。」

このくらいは言いたいものである。肯定的、聴聞的言葉の掛け方を先生や親御さんが心掛けてくれたらわざわざ相談室まで子どもたちも来る必要はない。聴聞（リスニング）が悩みを解決してくれる。